

人と猫が共に暮らす大分県佐伯市の深島。「愛着を持ってほしい」と約100匹すべての猫に名前が付いている



大分県佐伯市から定期船で約30分。周囲4kmの深島は、住民15人と約100匹の猫が暮らす「猫の島」として知られる。ただ、猫の世話をする住民が高齢化する一方で、猫は年々増加。「このままでは人も猫も不幸になる」と決断したのが、猫の一斉避妊去勢手術だった。(押川知美)

100匹猫の島一斉手術

島民15人「お世話係」は高齢化… 住民決断「繁殖防げ」



手術を終えた猫。ケアや気道の確保をボランティアが手伝える

大分・深島 ボランティア動く

戦後の多い時には約200人が暮らしたという深島。今は15人の住民のうち、10人が65歳以上だ。島の猫は、住民有志が年金などで世話してきた。しかし昨年1月、感染症とみられる病で相次いで死に、

3カ月間で約200匹が約80匹に減少。住民は十分な世話ができなかった。島唯一の民宿を営む安部あづみさん(67)は「あと数年で猫を世話できる人が足りなくなる」と不安がる。計画は3日間。昨年11月、基金スタッフや獣医師ら7人が島に渡った。

初日はボランティアも手伝い、食べ物を入れた捕獲器をあちこちに仕掛けた。2日目、1匹ずつケージに入った猫たちが不安げに鳴く中、集会場の一室で約50人の流れ作業が始まった。①麻酔をかける②腹の毛をそる③手術済みの印として耳をV字にカットする④開腹し処置をする⑤縫合し、体に付いた血などを拭く。所要時間は15分以内。傷は3〜5センチほどで、獣医師の山口武雄さんは「家猫と違い動き回る地域猫は、開腹を小さくして負担を軽くするよう心掛けています」。獣医師たちは約7時間で68匹を処置した。そして3日目、麻酔から覚めた猫たちが入ったかごを島の中心の広場に運んで解放した。一目散に駆け出す、恐る恐るはいつくはる、無事を確かめるように体をなめ合う…。個性豊かな猫たちを見守りながら、松下ヒサコさん(67)は「猫を見に来た観光客が喜んでくれるのが、うれしかねえ」と目を細めた。

今年3月下旬、獣医師2人が再び深島を訪問。昨秋は幼すぎた子猫8匹と捕獲を逃れた2匹の雄に施術し、ついに島のすべての猫が手術を終えた。安部さんは気を引き締めていた。「これがスタート。これから猫たちをどう守っていくか、みんなで考えた方がいい」